

家庭科教育の昭和史とともに生きる—宮原小治郎伝

## 第一部 あるジャーナリスト の生い立ち (7)

佐々木 享

(名古屋大学教授)

上田高女時代の小治郎の素顔  
宮原小治郎が『婦女新聞』に寄せた最初の文章（一九〇二年）は、この連載第四回（七月号）に紹介した「寄宿舎の朝」であり（第一二三号）、次の文章は「寄宿舎の夕」（第一四号）であった。戦前の中等学校——中学校、高等女学校、実業学校の例にもれず上田高女にも寄宿舎があった。小治郎

はある時期までその舍監を兼任していたものとみえる。前述のように小治郎は長男で、農業を継ぐべき立場にあった。一八九五（明治二十八）年に結婚した後も勤めることができたのは、両親が健在だったからであろう。九七年に長女さだよ、一九〇〇年に長男小七郎、一九〇四年に次男健雄が生まれている。網掛から上田高女に通勤することも不可能ではなかつ

たけれども、生家から坂城の駅に出るには現在とは違つて水量の多い千曲川を渡らなくてはならなかつた。川にかかる木橋は、いつたん増水すればたちまち流されだし、近道にあたる渡し舟も増水した時には頼りにできなかつた。そんなわけで小治郎は、結婚後も妻子を網掛の生家に置き、自らは上田の街に今で言う単身赴任していったわけである。

ところで上田高女の後身である長野県上田染谷丘高校には、同高女の初期の学友会の雑誌『松の操』が保存されている。それは印刷物ではなく、生徒も教師も和紙に筆で想うところを文章・和歌・絵などとしてしたため、それをそのままきれいに製本したものである。生徒の文章は幼さの抜けきらない

そこの烟(ハガタヨミ)

網村



金釘流の文字を並べたものと、水茎の跡も鮮やかなものとが

共存しており、明治期の女学生のいぶきを感じさせる。そうした文章の間隙を縫うようにして、網村と署名した小治郎の短文、和歌などもいくつか収められている。「そだの烟（自炊日誌の一節）」と題した挿絵つきの短文もその一つで、写真には写っていないけれども和歌も添えられている。

やや偽悪調の文章だけれども、この時期（たぶん一九〇六年ごろ）には小治郎が単身で下宿し自炊生活をしていたことをうかがうことができる。

また、「松の操」第二号（一九〇六年五月）に「偕行社の舞踏会に臨む」という網村署名の短文がある。偕行社は陸軍将校の親睦団体（一八九〇年以降は全員強制加入）で、東京・九段の本社は将校の社交場ともなっていた。しかしこの舞踏会は、文章からすると偕行社主催ではなく、各種のダンス等の講習会の性格を帯びたものであった。文末に「我は名残を残して帰らねばならぬを如何にせん（四月三日夜稿）」とある。学年末休みを利用した講習会に上京した折の一コマだったのである。上田の町で体操遊戯の講習会などを開いていた時期のことである。自らの専門を磨きあげることに熱心な様をかいま見ることができる。同時に、後に何回も触れるように小治郎が遠出を苦にしないというより旅行好きだったことも、この熱意を支えたと言えるようと思われる。

#### 朝鮮に渡ることが決まる

一九〇八（明治四十一）年正月は、公私多忙で「俗事紛々として我を襲い」、「正月の楽しみも我のみ独り其恩澤に浴さない」と小治郎は書いている（『婦女新聞』第四〇六号、一九〇八年二月十七日）。この記事は、四月からの京城高女に赴任することが決まったため、その準備に追われていたことを示唆している。

『家庭科教育』誌復刻版に寄せた「解説」では、次三男ならとにかく農家の長男であった小治郎が「遠く朝鮮に転じた契機等は不明である」と書いた。ところがその後の調査で、一九〇六（明治三十九）年十月から上田高女の校長をしていた三浦直が京城高女の初代校長に着任したこと、小治郎が信州体操教育界で活躍し、裁縫教育についても一家言を持つていることを知る同校長から高女創立の片腕として誘われたらしいことが判明した。

上田高女の三浦直校長が京城高女の初代校長に擬せられた経過、同校長の経歴等は、目下のところ残念ながら分かっていない。上田高女校長就任の辞において「自分は就職早々にて未だ学校の事情にも精通せず且つ土地の状況も知悉致しませぬ」と書いているから、それまで信州には縁のなかった人らしい。同じ文章の中で同校長は、「現今戦後膨脹に膨脹を加へたる我帝国は、婦人界の活動を要求すること彌益多くな

りました。「云々」とも書いている（『上田高等女学校校友会雑誌』第一号、一九〇七年三月）。時流となりつつあつた膨脹主義を正面から受け止める人物であつたことをかいま見ることができよう。

写真は、小治郎が上田高女で送り出した最後の卒業生（この写真は補習科生）の記念写真で、最後列中央が三浦校長、前から二列目、左端が宮原小治郎である。

#### 別離

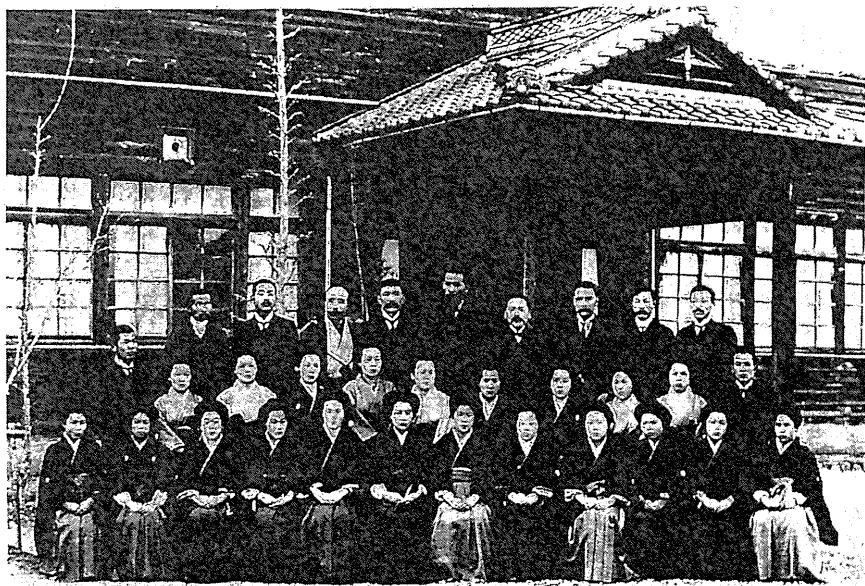
宮原小治郎の渡韓に際して、彼の詩歌の師大和田建樹は、数首の歌を贈っている。その一つは、

君の歌の袋やいかに富ますらん

猛虎一声韓山の月

というものであった。渡韓一か月後、小治郎は「歌袋いまだ富まずといへども、目に映じ、耳に響きつる趣味多き歌材」は豊富だと『婦女新聞』に書き送っている（第四二一号、一九〇八年六月一日）。小治郎は右の歌が気に入つたとみて、後年刊行した自著『朝鮮より』の巻頭にこれを掲げている。

小治郎の渡韓は師の大和田との永遠の離別となつた。大和田は小治郎が渡韓した一九〇八（明治四十一）年には五十歳となつた。旅行好きは相変わらずで、この年にも栃木県小山（一月）、千葉県銚子（二月）、東京府下の高尾山（八月）、愛媛県の松山（同月）、日光（十月）、泉州の牛龍寺（十一月）



と東奔西走していた。行く先々で歌が詠まれ、紀行文が綴られた。さらに翌一九〇九（明治四十二）年四月には九州めぐりの旅行を楽しんだ。生涯続いたこうした数多くの旅は、大和田の詩文を雅趣豊かにする栄養源であった。しかし、全国を歩く大和田の観光旅行もこの旅が最後となつた。この年八月に面接で入院した際は三週間ほどで退院したけれども、十月に脊椎炎で倒れてからは、事実上床に就ききりになつた。

翌一九一〇（明治四十三）年春に、大和田は小治郎宛に

うちつれて鶴冠山を越えん日

ゆめこよひより身を襲ふらん

この秋は袂（たもと）にしめてうた読まん

虎ふす野辺のたけのゆふかぜ

と書き記してきたという（『婦女新聞』第六〇〇号）。再起して小治郎とともに朝鮮を跋涉することをまだ夢みていたのであろうか。そして

つまづきしあしげの駒をいかにせん

こころ千里（ちさと）にむちは打てども  
という歌を小治郎宛に色紙にして贈ったころには、再起をあきらめたのである。

一九一〇（明治四十三）年秋、大和田は感冒発熱をおして海軍省依頼の軍歌の作詩に励んだが九月二十三日に危篤状態となり、十月一日に永眠した。

大和田建樹は、多数の著述を遺した。活字になつていらない紀行文、日記、和歌等も多い。しかし今日なお多くの人に大和田の名が知られるのは、数多くの唱歌、軍歌、校歌の作詩者としてである。軍歌「日本陸軍」（天に代りて不義を討つ……）、上田高女の元の校歌、若き日の福島四郎が勤めた埼玉県立浦和高校の校歌も大和田の手によるものである。また例えば、堀内敬三・井上武士編『日本唱歌集』（岩波文庫）には、いまなお多くの人が口づさむ「故郷の空」（夕空はれてあきかぜふき……）、「青葉の笛」（一の谷の 軍破れ……）など一〇編が収められている。筆者より少し上の世代の人は「散歩唱歌」を懐かしく覚えている。明治期には東海道線の始発駅であった新橋駅の玄関前と郷里宇和島には、生前から彼の名を高からしめた「鉄道唱歌」の歌碑が建っている。

小治郎は、一九〇二（明治三十五）年以来毎年欠かさず幾編かの文章を『婦女新聞』に寄稿していた。ところが、一九〇九年十二月から一九一一（明治四十四）年八月までの一年九ヶ月の間には一編も寄稿していない。師の倒れたこと、永遠の離別が傷手だったのだろうか。しかし、程なくして大和田未亡人一家も京城に渡つてくる。小治郎と大和田との縁は切れなかつた。